

作文交換活動のインターネット利用の試み

得丸 智子

要 旨

本稿では、得丸(2000a 他) で提唱されている参加者の相互作用を中心にすえる作文交換活動を、インターネットを通じて実施した場合の効果、および、紙媒体を用いて実施した場合との比較について述べる。

2000年に実施されたインターネットセッションを対象に分析した結果、インターネットを使用した場合も、紙媒体を使用した場合と同様に、「心理的出会いと自己変容の心理過程」「自己の内面を表現し確認する心理過程」「相互に相手を受け入れ理解する心理過程」「書くことへの意欲」「書くことへの自信」の5つの心理過程が進行することが確かめられた。

また、紙媒体使用セッションとの比較を行った結果、紙媒体使用において作文筆者との親密感がより強く体験されること、インターネット使用において、文字の読みやすさや情報量の多さが肯定的に評価されることがわかった。しかし、文章作成ツールとしての媒体評価には個人差が大きいことがうかがえた。

【キーワード】作文交換活動、インターネット、紙媒体、心理過程、異文化間交流

1. はじめに

1-1 教育におけるインターネット利用

インターネットの普及により、教育におけるコンピューター利用は新しい時代を迎えたといわれている。それ以前のコンピューター教育では、学習者がコンピューター画面に提示される教材を使い、コンピューターと対話しながら学習する CAI 型の学習が主流であった。この時代は、「コンピューターはすぐれた教師の代わりをつとめることができるか」(佐伯、1986、p174) が議論された時代でもあった。しかし、インターネットの普及は、コンピューターを人間と人間を結ぶ手段として利用することを可能にした。

三宅・杉本(1985、1990)の実践は日本では草分け的なものであるが、これは 1984年にアメリカ、イスラエルの共同研究者と開発した The Inter-Cultural Learning Network (ICLN)の一環として行われた。日本側は短大の英語教育として実施され、学生が自主

的に選定したテーマに基づいて海外の学生とネットワーク上で意見交換を行った。考える機会及び英語をコミュニケーションのための言語として使用できるような積極的な態度が養われたことが報告されている。

1993年から1999年の通産省、文部省による「ネットワーク利用環境提供事業」で、日本でのインターネット教育は大きく前進した。影戸（1999）の実践もその一つで、日本の高校生とアメリカの大学生を結んで「英語・日本語」での交流が行われた。日本側は「国際理解」の授業の一環として実施され、日常的交流によりステレオタイプのは正が進み、のびのびとした自己表現や、学習者としての共感、（語学学習として）間違っても使うことの重要性が認識されたとまとめられている。

この他にも電子メールを使った教育や、ビデオ会議、チャットを利用した教育など、実験的なものも含めて、多様な試みがなされている。

大隅（1998、p19）は、インターネットに接続されたパソコンの特徴として、それぞれのパソコンは基本的に対等であること、個人と個人の通信と情報のやり取りを国内だけでなく世界的な規模で行うことができること、大量の情報をすばやく処理できること、みずから書き込みや加工ができること等の点をあげている。

インターネットの普及は、個人の情報発信を世界規模で可能にした。これにより、個人の発信する情報が広く流通するようになった。反面、質量両面に渉る情報の氾濫や倫理上の問題も生じている。世界規模での個人の交流を、いかに自由かつ安全に行うかが問われている時代であるといえるであろう。

1-2 作文交換活動の概略

次に、本稿で取り上げる作文交換活動の概略を述べる。この活動は、これまで、原稿用紙に書いた作文を学習者が相互に交換して感想文を書き合う活動として実施されて来た。1) 作文や感想文の筆者を匿名としてプライバシーに配慮しながら、率直な自己開示を促す点、2) 巧拙、長短などの批判的態度を排して、思考や感情を読みとり、味わう態度で文章を読む点に特徴がある。1990年に日本人大学生を対象に開始され、異なる大学、異なるクラス間での交換活動が実施されて来た。1996年からは日本で学ぶ留学生にも対象を広げ、日本人学生と留学生、留学生相互の交換も実施され、日本語教育、異文化交流活動としても成果を上げている（得丸1998,2000a,2000b）。

自分の考えや気持ちを文章で表現する時間（自己表現セッション）、他の参加者の文章を読んで感想を書く時間（交流セッション）、自分の文章に対して他の参加者によ

って書かれた感想を読んで、活動全体の振り返り文を書く時間(振り返りセッション)の3つの部分から構成され、以下の5つの原則に基づいて運営される。1)活動中に書かれる文章の内容や巧拙を直接的に審判的評価の対象としない、2)現在の自分の意見や気持ちの率直な表現を歓迎する、3)筆者は何を表現したいのかを読み取る姿勢で読む、4)筆者のプライバシーに配慮するため文章の交換は匿名で行う、5)交換を希望しない筆者の文章は交換活動から除外する。

得丸(2000a)では、この活動の参加者に進行する心理過程が因子分析の手法を用いて分析されており、「心理的出会いと自己変容の心理過程」「自己の内面を表現し確認する心理過程」「相互に相手を受け入れ理解する心理過程」が存在し、「書くことへの意欲」「書くことへの自信」が高まることが報告されている。

1-3 なぜインターネットを利用して展開するのか

得丸(2000a)では、留学生を交えた活動において、日本人学生だけの活動よりも、上記の心理過程すべてがより強く体験され、さらに、日本人学生で「自己の内面を確認し理解する心理過程」が、留学生で「(日本語で)書くことへの自信」がより強く体験されると報告されている。

留学生を交えた活動においてこれらの心理過程がより強く体験されるのは、日常生活で日本人学生と留学生の相互作用の機会が少ないこと、文化的背景が異なるため、新たな知識や視点を得やすいことによると考えられる。また、留学生に「(日本語で)書くことへの自信」が強く体験されるのは、日本語母語話者との実質的内容のある対話の成立が、日本語での文章表現の成功体験と感じられるからだと考えられる。これらの事実、この活動をインターネットを通じて展開し、より多様な人々と交流することの有効性を示唆するものである。

しかし、インターネット使用時に、紙媒体使用時と同様の効果が得られるかどうかは検討を要する。また、インターネット使用に、紙媒体使用にない利点や問題点が存在する可能性もある。

以上のような問題意識から、本稿では、2000年に実施された日本人学生と日本で学ぶ留学生によるインターネットセッションを対象に、この作文交換活動のインターネットセッションの効果を検証し、利点と問題点を探る。

2. 目的

目的1. 仮説「作文交換活動のインターネットセッションでは、紙セッションと同様に5つの心理過程が進行する」を検証する。5つの心理過程とは、得丸(2000a)で示された「心理的出会いと自己変容の心理過程」「自己の内面を表現し確認する心理過程」「相互に相手を受け入れ理解する心理過程」「書くことへの意欲」「書くことへの自信」である。

目的2. 「インターネットセッションと紙セッションの違いは参加者にどのように体験されるか」を探索的に検証する。

3. 方法

3-1 インターネットセッション（以下ネットセッションと略す）

実施時期：2000年10月下旬～11月中旬

実施対象：東京都内の私立大学の『日本語表現法』の受講生。講座主任の許可を得て授業活動の一部として実施された。日本人学生は27名、留学生は32名で、日本人学生と留学生は別編成のクラスとなっている。留学生の出身は中国21、台湾5、韓国2、マレーシア2、ネパール1、ベトナム1であった。

実施場所：日本人クラスは、コンピューター教室で授業時間に実施した。1人に1台のコンピューター端末が用意された。授業時間内に終了しなかった場合は、自宅その他での活動も許可した。留学生クラスは、授業時間中にコンピューター教室を利用することが不可能であったので、教室外活動とした。授業課題提出用として、1週間に2時間、コンピューター教室2室60席を確保した。この他、学生は図書館内PCオープンフロアの86席のコンピューター端末を自由に利用することができた。

実施方法：紙媒体使用の作文交換活動をインターネットのホームページ上に移植して実施された。プログラムは、市販の改変自由のCGIプログラムをもとに変更を加えて作成した。活動手順を表1に示した。

表1 活動手順

ネットセッション	紙セッション
自己表現セッション 1. パソコンをインターネットに接続し、 http://www.sakubun.org にアクセスし「ENTER」 をクリックする。	自己表現セッション 1. 1000語の原稿用紙を1枚受け取る。 2. 配布された原稿用紙に、参加テーマに基づき作 文本文とタイトルを書く。

<p>2. 参加テーマをクリックする。 3. 「作文投稿」をクリックする 表示される作文投稿フォームに、作文本文、タイトル、氏名、学籍番号の他、所定事項を記入し、送信する。</p>	<p>3. 書き終えたら提出する。提出時に、教卓にある作業表から任意の番号を取得し、原稿用紙の該当欄に番号を記入する。作業表の該当番号欄に氏名、学籍番号を記入する。</p>
<p>相互交流セッション 4. 1～2は、自己表現セッションと同じ 5. 投稿されている作文のタイトル一覧から読みたい作文を選び No をクリックするか、または本文を一覧表示させる。 6. 感想を書きたい作文本文右下の「感想を書く方はここをクリック」をクリックする。 7. 表示される感想文投稿フォームに、作文に対する感想文、氏名、学籍番号他、所定事項を記入し送信する。 8. 手順 5～7 を 3 回繰り返す。</p>	<p>相互交流セッション 4. 教卓にある他の学生の書いた作文から、自分の読みたい作文を 1 編選び、感想文記入用紙を 1 枚受け取る。 5. 各自の席で、手順 4 で選択した作文を読み、感想文を書く。 6. 感想文を書き終えたら、教卓で作文に感想文をホチキスで留め、作業用紙の該当欄に氏名と学籍番号を記入する。作文を所定の場所に戻す。 7. 手順 4～6 を 3 回繰り返す。</p>
<p>振り返りセッション 9. 1～2は、自己表現セッションと同じ。 10. 表示される作文リスト中の自分の作文と、それに対する感想文の本文を表示させる。 11. 自分の作文と、それに対する他の参加者による感想文（通常複数）を読む。 12. 感想文右下「筆者コメントを書く方はここをクリック」をクリックする。 13. 表示される筆者コメント投稿フォームに、感想文を読んだコメント、氏名、学籍番号他所定事項を記入し、送信する。 14. 配布された振り返り自由記述質問紙に、活動全体についての内省を記入する。 15. 自由記述質問紙提出後、振り返りシートを受け取る。 16. 振り返りシートに記入し提出する。</p>	<p>振り返りセッション 8. 教卓から、自分の作文を受け取る。作文には、通常複数の他の学生による感想文がホチキス留めされている。 9. 自分の作文と、それに対する他の参加者による感想文（通常複数）を読む。 10. 配布された振り返り自由記述質問紙に、活動全体についての内省を記入する。 11. 10 で記入した自由記述質問紙を作文、感想文とともに提出し、振り返りシートを受け取る。 12. 振り返りシートに記入し提出する。</p>

(注) テーマはネットセッションは「男女差別・格差を感じる時」、紙セッションは「子供は何人？少子化社会を考える」とした。ネットセッションと紙セッションでテーマによる差が生じないよう、共に、個人的経験、社会的観点のいずれからも執筆可能なものとした。テーマを提示するにあたっては「テーマをもとに自由に考えて書くように」と教示した。

セキュリティの問題：活動原則の第 4 である匿名性の原則を遵守するため、ホームページ上には、氏名、学籍番号などの個人情報表示させなかった。教師のみがパスワードでアクセス可能な管理画面を作成し、個人情報を閲覧できるようにした。これらは、インターネット上のセキュリティの問題としても重要である。

実施手順の参加者への説明：ネットセッション参加者の日本人学生、留学生は、既に 1 年次前期課程の必修科目として「コンピューターリテラシー」を履修しており、ワープロソフトの使い方やインターネットへの接続方法など、基本的なパソコン操作を習得していた。従って作文交換のホームページの使い方のみを説明した。日本人クラスは、コンピューター教室で教師画面をモニターしながら口頭で説明した。留学生クラスは、授業時間中に手順を書いた文書を配布し、数人のグループに分けて教師のノ

ートパソコンを見せながら説明した。

測定道具：振り返りセッションで書かれた自由記述式質問紙と振り返りシートを用いた。測定は、活動の振り返りセッションの一部として実施された。自由記述質問紙に振り返りシートの影響が及ぶことを排除するため、先に自由記述質問紙を配布し、記入済み自由記述質問紙の回収と引き換えに、振り返りシートを配布した。留学生クラスは、授業中にコンピューター教室が使用できなかった関係で、自由記述質問紙への記入が教室外活動となった。授業中に自由記述質問紙を回収し、引き換えに振り返りシートを配布した。振り返りシートの記入は教室で行われた。

自由記述質問紙の質問文は以下の通りである。

質問 この活動について感じたことを自由に書いてください。

振り返りシートは得丸(2000a)所収の質問項目により作成し、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で回答を求めた。この質問項目は、1996年度の参加者によって振り返りセッションで書かれた自由記述をもとに作成され、1997、1998年度の参加者に実施したデータをもとに分析し、まとめられたものである。「心理的出会いと自己変容の心理過程」「自己の内面を表現し確認する心理過程」「相互に相手を受け入れ理解する心理過程」「書くことへの意欲」「書くことへの自信」の5つの観点から参加者の心理過程が測定できる。本稿末尾に付表として質問項目を掲載した。

3-2 紙セッション

実施時期：2000年11月中旬～12月中旬

実施対象：研究1と同じクラスの受講生。ただし、ネットセッション、紙セッションの両方に参加した受講生を分析対象とした。留学生クラスは、無作為に抽出した約半数に対して、別研究のためにインストラクションを変更したためこれを除外した。分析対象は、日本人学生20名、留学生は17名であった。留学生の出身地は中国12、台湾2、韓国1、マレーシア1、ベトナム1であった。振り返りシートの分析では、留学生2名(中国1、韓国1)に記入ミスがあったため、日本人学生は20名、留学生は15名を分析対象とした。

実施場所：日本人クラス、留学生クラスともに、一般教室を使用して実施された。

実施方法：通常の作文交換活動の方法で実施された。実施手順を表1に掲載する。

測定道具：振り返りセッションで書かれた自由記述式質問紙と振り返りシートを用いた。測定は、活動の振り返りセッションの一部として実施された。記入済み自由記述

質問紙の回収と引き換えに、振り返りシートを配布した。

自由記述質問紙の質問文は以下の通りである。

質問1. 前回の「男女差別・格差を感じる時」のセッションはインターネットのホームページを通じて行いました。今回の「子供は何人？少子化社会を考える」のセッションは原稿用紙を用いて行いました。2つの活動形式を経験して、原稿用紙とホームページでは、どのような違いがあると感じましたか。

質問2. 原稿用紙を用いた形式とホームページを用いた形式のどちらが好きですか。

振り返りシートはネットセッションと同一のものを用いた。

4. 結果と考察

4-1 目的1 仮説「作文交換活動のネットセッションでは、紙セッションと同様に5つの心理過程が進行する」の検証

はじめに、ネットセッションの自由記述質問紙を検討する（Jは日本人学生、Fは留学生の記述）。

ネットセッションの自由記述質問紙に書かれた記述には、5つの心理過程の進行を示す表現が多数みられた。それぞれの過程に言及していた学習者の割合と、記述の一部を抜き出して紹介する。

- (1) 「普段考えないようなことをみんなで考えた」(J)、「お互いの心を開いて話げできた」(F)など、参加者の間で心理的交流が進行していた。「みんなが真剣に色々な角度から指摘してくれたおかげで、私もだいふ考えさせられた」(J)、「他人の観点を読んで、考えて、自分の観点到影響した」(F)など、自分の考え方や意見に再検討が加えられたり、影響を受けたりしていた。「多面的な考えができるようになった」(J)、「自分の心が広くなった」(F)など、物の見方や考え方に变化が起きたことが述べられていた。これらは「心理的出会いと自己変容の心理過程」の存在を示していると考えられる。日本人学生14名(51.9%)、留学生15名(46.9%)がこの心理過程を記述していた。
- (2) 「本音をぶつけ合うことができた」(J)、「自分の考えをおもいきりあらわして」(F)など、率直な自己表現が進行していた。日本人学生では「自分の考えをまとめられた」(J)、「自分ってこんなこと考えてたんだ」(J)と、活動を契機に自己理解が進んだことが述べられていた。留学生記述には、直接これに対応するものはないが「考える空間が与えられた」(F)と思考の深まりが記述されていた。

これらは「自己の内面を表現し確認する心理過程」の存在を示していると考えられる。日本人学生 10 名(37.0%)、留学生 9 名 (28.1%)がこの心理過程を記述していた。

- (3) 日本人学生、留学生ともに、他の参加者の意見を理解できたとする記述が広くみられた。「自分の意見を書いて人から反論を受けるのはすごくいい事だと思う」(J)のように、反対意見も積極的に受け入れようとする姿勢を述べるものもあった。理解の方法には、「気づいた」(J、F)「わかった」(F)と理解の体験に焦点をあてて記述するものと、「知識を広げる」(J)「勉強になる」(F)と知識の獲得に焦点をあてて記述するものがあった。これらは「相互に相手を受け入れ理解する心理過程」の存在を示していると考えられる。日本人学生 20 名(74.1%)、留学生 17 名 (53.1%)がこの心理過程を記述していた。
- (4) 文章表現が「好きになった」(J、F)「これからも書きたい」(J、F)など、文章表現活動に対する意欲の高まりを示す記述が見られた。特に留学生で、この活動が新たな日本語学習の動機付けになっていることがうかがえた。しかし「この活動が辛い」(F)も 1 例あった。これらは「書くことへの意欲」の存在を示していると考えられる。日本人学生 4 名(14.8%)、留学生 9 名 (28.1%)がこの心理過程を記述していた。
- (5) 留学生を中心に「表現能力が向上した」(F)「今はちょっと自信を持っている」(F)と(日本語)文章表現能力の向上について記述されていた。能力の不足への気づきに言及するものもあった。日本人学生や他の参加者の文章を読むことが自分の日本語を見直すきっかけとなっていることが記述されていた。これらは「書くことへの自信」の存在を示していると考えられる。日本人学生 2 名(7.4%)、留学生 11 名 (34.4%)がこの心理過程を記述していた。

これらの結果から、ネットセッションにおいても紙セッションと同様に 5 つのカテゴリーに分類可能な心理過程が進行するといつてよいであろう。

次に、両セッションの振り返りシートの得点を検討する。

振り返りシートの 31 項目について、「非常にそう思う」を 5 点、「全くそう思わない」を 1 点(反転項目は逆傾斜配点)とし、各心理過程の得点を算出した。その結果を表 2 に示す。

表2 振り返りシートの得点

因子名		出会い			自己			他者			意欲			自信			
参加者	媒体	N	平均	SD	分散比	平均	SD	分散比	平均	SD	分散比	平均	SD	分散比	平均	SD	分散比
日本人	ネット	20	3.45	0.62	1.32 (f=39)	3.24	0.58	0.83 (f=39)	4.02	0.4	1.13 (f=39)	3.18	1.01	0.15 (f=39)	2.42	0.82	0.5 (f=39)
	紙	20	3.65	0.48		3.41	0.56		4.18	0.58		3.08	0.54		2.58	0.67	
留学生	ネット	15	3.46	0.71	0.06 (f=29)	3.21	0.85	0.08 (f=29)	3.8	0.73	0.12 (f=29)	3.27	1.12	0.09 (f=29)	2.8	0.92	0.03 (f=29)
	紙	15	3.51	0.41		3.14	0.48		3.72	0.45		3.38	0.92		2.98	0.76	
全体		35	3.52	0.56	-	3.26	0.62	-	3.95	0.56	-	3.21	0.89	-	2.67	0.8	-

(注) 因子名略称: 「出会い」は「心理的出会いと自己変容の心理過程」、「自己」は「自己の内面を表現し確認する心理過程」、「他者」は「相互に相手を受け入れ、理解する心理過程」、「意欲」は「書くことへの意欲」、「自信」は「書くことへの自信」、fは自由度

ネットセッション、紙セッションの各因子の得点は近似していた。一元配置の分散分析を実施した結果、どの因子にも媒体による有意な差はみとめられなかった。これにより、5つの心理過程の体験の強さに関して、両セッションで違いがあるとはいえないことがわかる。

自由記述質問紙の記述と振り返りシートの得点から、目的1の仮説「作文交換活動のネットセッションでは、紙セッションと同様に5つの心理過程が進行する」について、この仮説は支持されたといってよいであろう。

4-2 目的2. 「ネットセッションと紙セッションの違いは、参加者にどのように体験されるか」の探索的検証

紙セッションの自由記述質問紙を検討する(Jは日本人学生、Fは留学生の記述)。

最初に、質問2「原稿用紙を用いた形式とホームページを用いた形式のどちらが好きですか。」に対する回答結果を、表3に掲載する。

表3 「原稿用紙を用いた形式とホームページを用いた形式のどちらが好きですか」の回答

	日本人学生	留学生
ネット	12名(60.0%)	ネット 10名(58.8%)
原稿用紙	8名(40.0%)	原稿用紙 6名(35.3%)
どちらともいえない	0名(0%)	どちらともいえない 1名(5.9%)
計	20名	計 17名

日本人学生、留学生とも、6割程度が原稿用紙よりもホームページに好感をもって
いた。以下、ホームページが好きと回答したものを「ネット派」、原稿用紙が好きと回
答したものを「紙派」と呼ぶこととする。

次に、質問1「2つの活動形式を経験して、原稿用紙とホームページではどのよう
な違いがあると感じましたか」に対する自由記述回答を検討する。記述された内容は、
媒体に対する心理的構え、リテラシー（読み書き能力）、活動環境に関するものに分類
可能であった。

(1) 心理的構え：ネット使用に対する心理的構えの面では、ネット派と紙派で差が見
られた。日本人学生のネット派に、「好き」(J)「おっくうでない」(J)「打つだけ
で楽しい」(J)「パソコンだと考えがスラスラ出てくる」(J)などと肯定的記述が
見られ、文章を書く手段としてパソコンに親近感を持つ学生がいた。留学生のネ
ット派は「新奇な感じ」(F)があるのみで、親近感の記述は見られなかった。ネッ
ト使用に対して、紙派の中に「なれていない」(J)「機械に弱い」(J)「考えが少
なくなる」(F)などの否定的記述が見られた。

紙使用に対する心理的構えの面では、日本人学生と留学生、ネット派と紙派と
の間に際立った差は見られなかった。「人の手による温かさ」(J)「それぞれの人
の姿が浮かぶ」(F)など、読むときに、書き手の人柄や書くときの態度が伝わって
くるとの肯定的記述が見られた。書くときには、日本人学生ではネット派にも紙
派にも、「気持ちを入れやすい」(J)など自分の考えが表現しやすいとの記述があ
った。ネット派に紙使用に対して「堅苦しさ」(J)を感じるとしたものがあつた。
留学生の紙派に「落ち着きを感じる」(F)「自分の手で文字を書く面白さ」(F)が
あつた。

(2) リテラシー：読む技能に関しては、ネット派、紙派ともに、ネット使用の方が、
文字が規格化されていて読みやすいとの肯定的記述(J、F)が広く見られた。書
く技能に関しては、ネット派、紙派で差がみられた。ネット派では「パソコンの
方が加筆訂正が容易」(J)とされていたが、紙派ではパソコンは「タイピングや
操作に時間がかかる」とされ(F)、紙媒体の方が加筆訂正が容易であるとされて
いた(J)。紙媒体使用に対して「言いたい言葉がすぐ漢字で書ける」(F)の肯定的
記述があつた。ネット派にもタイピングより書くほうが楽であるとの記述があつ
た(J、F)。ネット使用に対して「パソコンの技能がのびる」(J)「練習したほうが

よい」(F)など、強化的動機の記述も見られた。

ワープロソフトの漢字変換機能について、日本人学生に「漢字で悩まなくていい」(J)と肯定的記述が見られた。留学生では「難しい漢字も読み方だけわかればぱっと出る」(F)と肯定的なもの、と、「発音の正しさ」(F)が要求されると否定的なものがあった。前者の国籍は中国、後者の国籍は韓国であった。留学生に、文法や文字の自動チェック機能に肯定的に言及するもの(F)があった。

- (3) 活動環境：ネット使用に対して、ネット派、紙派ともに、「多くの作文や感想文を読める」(J、F)「(多くの中から)選べる」(J、F)「自分の作文を多くの人に読んでもらえる」(J、F)と情報量の多さが肯定されていた。紙使用に対し「自分のところに1つだけ作文を持ってこることができるので集中できる」(J)の肯定的記述があった。

時間空間的側面に焦点が当てられた記述として、ネット使用に対して「時間に制限がない」(J)「自宅でもいつでも読める」(F)「遠く、広く知らせることができる」(F)などの肯定的記述があった。「パソコンを持っていないので図書館に行かなくてはならない」(F)もあった。紙使用に対して「授業でしか読めない」(J)の否定的記述があった。

(1)~(3)から、他の人の書いた文章を読む場合には、ネット使用よりも紙使用に、書いた人との心理的密着性が強く体験されることがわかった。手書き文字か活字かの違いが反映されているともいえる。読みやすさの面ではネット使用が高く評価されていた。文章を書く場合の心理的構え、タイピングや加筆訂正の容易さについては、個人差が大きかった。環境面では、ネット使用の情報量の多さ、時間や場所の自由度の高さが肯定的に受け入れられていた。自宅でのパソコンの有無による違いもうかがえた。

5. まとめと今後の課題

今回の分析により、得丸(2000a 他)で提唱されている作文交換活動をインターネット上で実施する場合の心理的効果が確かめられた。

今後は、パソコンを利用して文書を作成することに関わる心理過程を、母語との関連、パソコンの利用状況、ワープロソフトの機能の精通度等の観点から、微視的に研究していく必要があるであろう。

また、今回の実施では、紙媒体との比較を行うため、ネットセッションの環境を紙

セッションに準じて設定した。そのため、本来のパソコン利用の利点が十分に活用されていないとも言える。今後は、パソコン使用あるいはインターネット接続環境ではじめて使用可能な辞書ツール、読解支援ツール、文章作成ツールの活用なども積極的に行っていくべきであろう。インターネットの最大の利点である、海外も含めた遠隔地との交流も推進するべきであろう。

今後は、紙媒体使用セッションと併行して、インターネット使用セッションを、積極的に企画・実施していくことが期待される。

(付記) この活動は、「さくぶん・おるぐ」(<http://www.sakubun.org>、2002年より<http://nihongo-net.com>に移行予定)で発展的に継続展開中である。本稿のネットセッションも上記URLで閲覧可能である。

引用文献

- (1) 大隅紀和(1998)『インターネットと教育実践』黎明書房
- (2) 佐伯胖(1986)『コンピューターと教育』(岩波新書)
- (3) 影戸誠(1999)「国際共同授業の実践・アメリカン・ハワイ・西陵」IT/Education フォーラム「教育情報」<http://www.nichibun-g.co.jp/joho/it-edu/home.html>
- (4) 影戸誠(2000)『翼をもったインターネットー学校・教室そして授業で一』日本文教出版
- (5) 得丸智子(1998)「留学生と日本人学生による作文交換活動—構成的エンカウンターグループを応用して」『日本語教育』96号,166-177
- (6) _____(2000a)「留学生と日本人学生の作文交換活動における個人心理過程」『日本語教育』106号 47-55
- (7) _____(2000b)「大学生を対象とした作文交換活動における個人心理過程の分析」『人間性心理学研究』18巻1号,46-57
- (8) 増田若菜(1999)『オリジナル掲示板を作ろう』ディー・アート
- (9) 三宅なほみ・杉本卓(1985)「機能的な英語教育：コンピューター通信を利用した実践」青山学院女子短期大学紀要 39,1-14
- (10) 三宅なほみ・杉本卓(1990)「国際学習ネットワークを利用した言語・国際理解教育青山学院女子短期大学紀要 44,65-77

(付表) 振り返りシート 質問項目 (得丸、2000a による)

(出会いと自己変容の心理過程)

1. 自分は他の人の文章を読んでその考えに影響を受けたと思う。
2. 他の人の文章を読んで勇気づけられた。
3. 思ったことを文章にすることで、自分自身が変わっていきける。
4. 感動した文章に出会った。
5. 他の人の文章を読んで人が生きているという感じがした。
6. 時間をおいて自分の文章を読むことによって自分を見つめ直した。
7. この活動を通じて物事を多方面からとらえられるようになった。
8. 文章を書くうちに自分の問題が見えてきた。
9. 他の人の感想を読んで意識していなかったことに気付いた。

(自己の内面を表現し確認する心理過程)

10. 素直な気持ちをストレートに書けた。
11. 文章を書いたことに対して満足感を味わった。
12. 自分の作文には自分なりに満足している。
13. 作文を通して現在の自分を再確認できた。
14. 普段は口に出せない気持ちが出せた。
15. 文章にすることで口に出して言いづらい事が書けた。
16. 作文を通して新たな自分を発見した。
17. その時のありのままの自分とその作文の中にいる。
18. 自分が思っていることを他の人に伝えることが出来た。
19. 文章を書くことによって自分の考えが整理できた。

(相互に相手を受け入れ、理解する因子)

20. 他の人は自分の作文をていねいに読んでくれたと感じる。
21. 皆それぞれに頑張っている。
22. 他の人は自分の作文を温かく迎え入れてくれた。
23. 他の人の批判もすんなりと受け入れることができた。
24. 人間はささえ合っていくものだと思う。
25. 他の人がどういうことを考えているかを知ることができた。

(書くことへの意欲)

26. これからも時々(日本語)で文章を書いていきたい。
27. (日本語で)文章を書くのは好きだ。
28. この活動のおかげで、(日本語)で文章(日記、手紙など)を書くようになった。

(書くことへの自信)

29. 今は(日本語で)文章を書くのに自信がある。
30. 自分の(日本語)文章表現能力は向上したと思う。
31. 自分の考えを(日本語で)文章にするのは難しい。

(日本女子体育大学)

Composition Exchange Project on the Internet

TOKUMARU Satoko

This report is an inquiry of investigation about a composition exchange project between Foreign and Japanese University Students proposed by Tokumaru (2000a). The effect when activities were developed on the Internet was investigated. It was found out that five individual mental processes ; mental discovery and self-transformation; self-expression and self-awareness; mutual acceptance and understanding; improvement in composition ability; positiveness to writing progressed in the same way as the case of the using papers.

Activities by the Internet were compared with activities by the papers. Intimacy toward the writer was strongly experienced in the activities by the papers. The easiness to read was strongly experienced in the activities by the Internet. The promotion of the activities by the Internet and a more detailed analysis are expected.

(Japan Women's College of Physical Education)